

〈論文〉

日本における中国口語起源漢語の訓点を通じて見る  
西大寺本金光明最勝王經平安初期点中に漢文訓読の特徴  
— 二字動詞を中心として —

唐 焯

1. はじめに

魏晋南北朝から唐代に至る中国では、口語的表現の二字漢語を多数造出して複雑多彩な表現を生み出した。これらの中国口語的表現を含む文章は、元来単音節語であった古典漢文の訓読法では読み解くことが難しい。この点に関して発表者は、中国口語的表現を少なからず含む『日本書紀』中の主として中国口語起源の二字漢語を取り上げて、平安中期の岩崎本平安中期点以来の訓読資料を手がかりに、日本人がそれらの口語的表現を読解し得たか否かを検討して、専門研究書『日本書紀における中国口語起源二字漢語の訓読』を刊行した(北海道大学出版会, 2009年3月)。『日本書紀』古訓点本では、中国口語起源の二字名詞・二字動詞・二字形容詞などの概念語は殆どが一語の和訓として適った読み方がされているが、二字副詞・二字連詞(接続語)等では一語として読まない例の方が多く、和訓も不当な例が相当数存することが判明した。

元来漢訳仏典は四字一句を基調とすることが多く、それと密接に関連するのが二音節語の多用であり、口語語彙が多く含まれているが、従来も多くの指摘がなされているが、実際には本格的な調査は殆どなされていない。本論文では、日本の訓点で其れらの中国口語起源の二字漢語を読解し得ているか否かを検討する為に、代表的平安初期訓点資料である西大寺本金光明最勝王經平安初期点を取り上げる。同本は、830年頃の加点の詳細な訓点資料であり、春日政治による訓点語学の記念碑的労作『西大寺本金光明最勝王經古点の国語学的研究』(岩波書店, 1942年12月)に影印・訓み下文・研究が公刊されている。本発表では、前述の日本書紀に倣って中国口語起源二字漢語の箇所を、訓読の要である動詞を中心として本資料がどのように訓読しているのかを検討する。

## 2. 研究方法

中国口語表現自体の研究については、太田（1958, 改訂 1981）が画期的なものであり、本論文でも大いに参考としている。また、金岡（1978）・志村（1984）・塩見（1995）・程（1992, 改訂 1994）、程（2003）等の専門書も参考とした。松尾（1987）は唐代口語研究の視点から積極的に『日本書紀』を取り上げ、訓読にも踏み込んでいるので大いに参考とし、また、松尾（1986a）（1988）の中国口語表現についての論文も参考とした。更に、中国口語表現を多く含む敦煌変文の張・黄（1997）の校注も参考としている。尚、二字漢語の由来を概観する上で、その二字漢語自身が古典漢文にも出て来る単語であるか、或いは魏晉南北朝から使われた単語であるか、又仏典特有語か、或いは仏典にも出て来ない俗語かによって、訓読する難易度が異なり、学習の方法も異なるので、データベースである「国学宝典」「CBETA 電子仏典」や『敦煌変文校注』を利用して、使用典籍・年代・繁寡等を知る手がかりとするが、本論文の目的は西大寺本金光明最勝王経平安初期点中の主として中国口語起源の二字動詞を取り上げて、それらの箇所がどのように訓まれているかを解明して行くことである。

本論文でも、前に検討した『日本書紀』訓点資料の例に倣って検討するが、本資料では

### I 二字一語として訓んでいる例

I - 1 一語として訓んでいる例

I - 2 合符のみを加点している例

### II 二字一語として訓んでいない例

II - 1 二字一語として訓まず和訓も不当な例

II - 2 二字一語として訓んでいないが文意は大きく外れていない例

と分類して考察する。

ここで取り上げる一語・二語という認定は、現代の文法規準の一語・二語ではなく、訓点を加点した者の意識としての一語・二語という規準である。日本人の単語意識は、現代と平安時代とは異なり（石塚 1985・1986）又、『日本書紀』岩崎本平安中期点以外では明確に示されていないが、熟合符・訓合符、加点位置（二字に亘って訓点を付けているか否かなど）などを参考として、その二字漢語が一概念として訓まれているか二概念として訓まれているかを規準として分類する。

## 3. 二字動詞の訓法

二字動詞は下記の 13 語を検討する。（漢音 50 音順）

爰念 安置 雲集 経過 自愛 周旋 思念 震動 吹倒 断絶 啼泣 遊行 往還
--

I 二字一語として訓んでいる例

I - 1 一語として訓んでいる例

(I - 1 - 1) 愛念 (音読一語)

< 1 > 更相親穆。尊重愛念。p.58 尊重愛念<sub>む</sub>

< 2 > 我弟貌端嚴 父母偏愛念。p.192 愛・念<sub>し</sub>

これらの例で平仮名はヲコト点であることを示し、合符は二字間の中央を横組中央で、二字間の左側を横組下部で示す。

漢籍の用例を『国学宝典』を利用して検索すると、『漢書』0例、『後漢書』0例、『晋書』0例、『梁書』1例、『魏書』1例、『隋書』1例、『樂府詩集』0例、『世說新語』1例、『祖堂集』0例、『遊仙窟』0例。一部例をする。

早蒙愛念，敢布腹心。（『梁書』・卷22）

聿同産弟風，幼養於宮，文明太後特加愛念。（『魏書』・卷71）

人生子孫，誰不愛念，既為天下，事須割情。（『隋書』・卷2）

藍田愛念文度，雖長大，猶抱著膝上。（『世說新語』・方正第五）

仏典の用例を「CBETA 電子仏典」を利用して検索すると1227用例が存在する。2例を示す。

其人於女無復愛念，染著之情。（東晉闍賓三藏瞿曇僧伽提婆譯『中阿含經卷第四』444 - 16）

其父愛念心不暫捨。爾時守宮殿神語大王言（失譯人名在後漢『大方便佛報恩經卷第一』128 - 26）

『敦煌變文校註』には2例がある。2例を示す。

東西舉歩而行，看眾咨嗟，無不愛念。（『廬山遠公話』）

父母而□（常）偏心愛念。今復更得摩尼珠寶。（『雙恩記』）

劉堅・江藍生（1997, 改訂1998）では、「愛念」は、「好きの意味である」と説明している。万久富（2006）では「早期訳経中の常用語，「好き，思念」の意」とする。

本資料では< 2 >の例に中央合符及びサ変動詞であることを示す「し」が「念」字に加点されているので、音読一語サ変動詞として訓まれている。

(I - 1 - 2) 安置 (音読一語)

< 1 > 地散衆名花。安置師子殊勝法座。p.103 安置<sub>し</sub>…法座<sub>を</sub>

< 2 > 水灑地。散衆名花。安置処所設四王座。p.106 安置<sub>して</sub>処・所に

< 3 > 作我多聞天像，并画男女眷属之類。安置坐處，咸令如法。p.116 安置<sub>む</sub>こと坐・處<sub>に</sub>

< 4 > 怨敵制諸異論。當於淨室安置道場。p.154 安置道場<sub>を</sub>

< 5 > 前安置法式誦此神呪 p.154 安置<sub>して</sub>法式<sub>を</sub>

漢籍の用例を『国学宝典』を利用して検索すると、『漢書』1例、『後漢書』0例、『晋書』0例、『梁書』0例、『魏書』6例、『隋書』7例、『樂府詩集』1例、『世説新語』0例、『祖堂集』4例、『遊仙窟』2例がある。一部例を示す。

今當安置我，欲歸耳！（『漢書』・卷97）

安置關西歸款之戶，（『魏書』・卷73）

今我方死，宜好安置。（『隋書』・卷68）

日已將晚，且歸本位安置，明日卻來。（『祖堂集』・卷15）

料理中堂，將少府安置。（『遊仙窟』）醍醐寺本 1344年点「安・置」真福寺本 1353年点  
「安  
置」

庶張郎共娘子安置。（『遊仙窟』）醍醐寺本 1344年点「安・置ミマサム / マシマセ」真福寺本 1353年点「安・置」

仏典の用例を「CBETA 電子仏典」を利用して検索すると 2770例が存在する。2例を示す。

安置敷具。（元魏涼州沙門慧覺等在高昌郡譯『賢愚經卷第十』4-418）

安置床榻。（宋天竺三藏求那跋陀羅譯『雜阿含經卷第四十三』2-315）

『敦煌變文校註』には9例ある。2例を示す。

後取其疏抄將入寺内，于經藏中安置。（『廬山遠公話』）

舜得母錢，佯忘，安置米囊中而去。（『舜子變』）

張涌泉・黃征（1997）では「安置」は「安放，安歇」の意味とされている。劉堅・江藍生（1997，改訂1998）では「安置は「落ち着かせる，適当な場所に置く」と説明している。日本書紀では系統も年代も異なる訓点資料で，何れも一語の和訓として訓んでいる。

本資料では，合符を加点した例は見られないが一語の音読サ変動詞として訓んでいるものと見做される。

（I - 1 - 3）周旋（音読一語）

< 1 > 池四辺。周旋而視。時彼衆魚。p.180 四の辺に周旋<sub>して</sub>

< 2 > 為求花果捨父周旋。至大竹林。p.188 捨<sub>て</sub>父<sub>を</sub>周旋<sub>して</sub>至<sub>て</sub>大竹林<sub>に</sub>

漢籍の用例を『国学宝典』を利用して検索すると、『漢書』2例、『後漢書』13例、『晋書』24例、『梁書』3例、『魏書』9例、『隋書』9例、『樂府詩集』4例、『世説新語』12例、『祖堂集』1例、『遊仙窟』0例。一部例を示す。

周旋無端，終而復始，無窮已也。（『漢書』・卷 21）  
櫛風沐雨，周旋征伐，劬勞王室。（『晉書』・卷 2）  
但遊處周旋，並淹歲序，造膝忠規。（『梁書』・卷 27）  
令將士周旋，仆與君公緩轡而觀之，不亦美也？（『隋書』・卷 95）  
某甲只聞洞山刮骨之言，不得周旋，請上座與某舉看。（『祖堂集』・卷 6）  
與君周旋，樂首亡餘。（『樂府詩集』・卷 54）

仏典の用例を「CBETA 電子仏典」を利用して検索すると 735 用例が存在する。2 例を示す。

周旋往返十方世界。而於衆生。（於闐國三藏實叉難陀奉制譯『大方廣佛華嚴經卷第五十六』340 - 28）  
心意不專周旋不安。人能自安靜為善。（後漢月氏國三藏支婁迦讖譯『佛說無量清淨平等覺經卷第四』298 - 05）

『敦煌變文校註』には 8 例がある。2 例を示す。

致酒謝坐，禮讓周旋，國家音樂，本為酒泉。（『茶酒論』）  
若於父母解周旋，土地神龍盡喜歡；（『父母恩重經講經文』）

程湘清（1992）では「『回旋，交際応接する，競争』の意」とする。

方一新・王雲路（2006）では「交際，事を共にする」とする。

本資料では，合符を加点した例は見られないが一語の音読サ変動詞として訓んでいるものと見做される。

（I - 1 - 4）思念 （一部 II - 2 - 4）

< 1 > 善思念之。吾当為汝分別解説。p.22 善，思 - 念<sup>クセヨ</sup> （片仮名は，原本で 830 頃仮名点であることを示す。）

漢籍の用例を『国学宝典』を利用して検索すると、『漢書』5 例、『後漢書』1 例、『晋書』0 例、『梁書』1 例、『魏書』1 例、『隋書』1 例、『樂府詩集』3 例、『世說新語』1 例、『祖堂集』1 例、『遊仙窟』0 例がある。一部例をする。

竊自思念，過已大矣，行已虧矣，長為農夫以沒世矣。（『漢書』・卷 66）  
楊目又遣都督範思念，別將曹龍牙數萬眾來援。（『梁書』・卷 32）  
始光中，世祖思念舅氏，以超為陽平公，（『魏書』・卷 83）  
思念故鄉，郁郁累累。（『樂府詩集』・卷 62）  
五子哀戀，思念其母。（『世說新語』・方正第五）

仏典の用例を「CBETA 電子仏典」を利用して検索すると 2456 用例が存在する。2 例を示す。

誌求佛法不退轉，思念慈悲無厭倦。(大唐於闐三藏屍羅達摩『佛說十地經卷第四』551 - 28)

我常思念此子。無由見之。而忽自來。(後秦龜茲國三藏法師鳩摩羅什奉詔譯『妙法蓮華經卷第二』16 - 24)

『敦煌變文校註』には8例がある。2例を示す。

數載有餘，思念空門，無由再入。(『廬山遠公話』)

寂然而座，思念欲界苦惱。(『太子成道經』)

本資料では、二字の中央に合符があり「念」字に仮名点「セヨ」が加点されているので、一語の音読サ変動詞として訓んでいる。但し後述する如、二語として訓んでいる例(Ⅱ - 2 - 4)も3例が存在する。

(Ⅰ - 1 - 5) 震動 (音読一語)「一部Ⅱ - 2 - 5」

<1>時大地六種震動。即便開裂。七宝制底。p.187 震動<sub>+</sub>

<2>血漸近虎辺是時大地六種震動。p.191 六種<sub>に</sub>震動<sub>すること</sub>

漢籍の用例を『国学宝典』を利用して検索すると、『漢書』14例、『後漢書』8例、『晋書』15例、『梁書』0例、『魏書』6例、『隋書』1例、『樂府詩集』0例、『世說新語』1例、『祖堂集』3例、『遊仙窟』0例がある。一部例を示す。

爵位重累，震動海内。(『漢書』・卷25)

威權翕赫，震動郡県。(『後漢書』・卷46)

故乘間而發，江陵震動。(『晋書』・卷99)

蠻夷必懷震動，乘彼離心，無往不破。(『魏書』・卷77)

宮殿人舍，山川大地鹹悉震動。(『祖堂集』・卷1)

諸葛亮之次涓濱，關中震動。(『世說新語』・方正第五)

仏典の用例を「CBETA 電子仏典」を利用して検索すると2195用例が存在する。2例を示す。

雷電風雨震動。天地。時有耕者。(東晉平陽沙門釋法顯譯『大般涅槃經卷中』198 - 19)

地大震動。光照十方。(西晉三藏竺法護譯『大寶積經卷第十三』71 - 26)

『敦煌變文校註』には1例がある。その例を示す。

才登座上，震動魔宮。(『破魔變』)

志村(1984)では「『除盡』は使成複合動詞である。」と説明している。

本資料では、合符を加点した例は見られないが、「動」字にそれぞれヲコト点「す」「す

ること」が加点されているので、音読一語サ変動詞として訓んでいるものと見做すことができる。但し、後述するように(Ⅱ-2-5)、「(フル)ひ(ウゴ)キ」「(フル)ひ(ウゴ)ク」と二語として訓んでいるものも2例がある。

(Ⅰ-1-6) 断絶 (音読一語)

<1> 不断絶故。是故説常。p.25 不断絶故

<2> 眼根常観於色処。耳根聴声不断絶。p.86 不<sub>テ</sub>断絶<sup>セ</sup>

<3> 广宣流布。令不断絶。利益有情。p.112 不<sub>テ</sub>断絶

漢籍の用例を『国学宝典』を利用して検索すると、『漢書』1例、『後漢書』14例、『晋書』13例、『梁書』6例、『魏書』12例、『隋書』6例、『楽府詩集』20例、『世説新語』0例、『祖堂集』54例、『遊仙窟』1例がある。一部例を示す。

亦宜因其萌芽，早断絶之，及已成形然後戰師，則萬姓被害。(『漢書』・卷95)

倫案之愈急，後遂断絶，百姓以安。(『後漢書』・卷41)

人皆流散，道路断絶，千里無煙。(『晋書』・卷114)

内外断絶，綸聞其急，欲往救之。(『梁書』・卷29)

寇賊萬重，四方音信，莫不断絶。(『魏書』・卷41)

見樂器弦多断絶，又有塵埃，若不用者，以為不好聲妓，善之。(『隋書』・卷3)

我今無嗣，種姓將恐断絶。(『祖堂集』・卷1)

遙望秦川，心肝断絶。(『楽府詩集』・卷25)

真成物外奇稀物，实是人間断絶人。(『遊仙窟』)

仏典の用例を「CBETA 電子仏典」を利用して検索すると2147用例が存在する。2例を示す。

餘有善根而未断絶。東晋罽賓三藏瞿曇僧伽提婆譯『中阿含經卷第二十七』601 - 28)

於無量無數劫。未曾断絶悉能壞亂衆生身心。(於闐國三藏實叉難陀奉制譯『大方廣佛華嚴經卷第十九』105 - 11)

『敦煌變文校註』には2例がある。2例を示す。

泉水傍流，豈有春冬断絶。(『廬山遠公話』)

爐上香雲天断絶，心中憶念法花經。(『妙法蓮華經講經文』)

志村(1984)では「断絶」は使成複合動詞である。」と説明している。

本資料では、二字の間に合符を加点した例は見られないが「絶」字に仮名点「セ」を加点した例があるので、音読一語サ変動詞として訓んでいるものと見做すことができる。

## (I - 1 - 7) 遊行 (音読一語)

< 1 > 随処任遊行。方求仏舍利。p.13 任に遊行<sup>ま</sup>せむに

< 2 > 名水蔵。是時流水。將其二子。漸次遊行城邑 p.179 遊行<sup>す</sup>として城邑聚落に

< 3 > 次遊行至其空沢。見有一池。名曰野生。p.180 次に遊行<sup>す</sup>として

漢籍の用例を『国学宝典』を利用して検索すると、『漢書』1例、『後漢書』0例、『晋書』4例、『梁書』3例、『魏書』3例、『樂府詩集』4例、『世説新語』0例、『隋書』2例、『祖堂集』4例、『遊仙窟』0例がある、一部例を示す。

豨將候敵將萬餘人遊行。(『漢書』・卷1)

言周穆王遊行四海。(『晋書』・卷51)

吾與汝曹遊行四境。(『魏書』・卷35)

於是被發陽狂，遊行市裏。(『隋書』・卷78)

有一日大師領眾出牆遊行次。(『祖堂集』・卷15)

遊行天下，令樂人歌之。(『樂府詩集』・卷64)

仏典の用例を「CBETA 電子仏典」を利用して検索すると、3010例が存在する。2例を示す。

遊行林野。(元魏婆羅門瞿曇般若流支譯(『正法念処經卷第六』17-29)

若遊行時。則詳徐。(元魏婆羅門瞿曇般若流支譯『正法念処經卷第六』17-10)

『敦煌變文校註』には8例がある。2例を示す。

吳國臣佐，乘馬入市遊行。(『伍子胥變文』)

昨日遊行觀看，見於何物？(『太子成道經』)

劉堅・江藍生(1997, 改訂1998)では「遊行」は「散歩」の意味とされる。

日本書紀訓点資料では系統も年代も異なる訓点で何れもの確に和語一語として訓んでいる。本資料では、二字の間に合符を加点した例は見られないが、3例とも「行」字にヲコト点でサ変動詞活用語尾を加点しているので、一語の音読サ変動詞として訓んでいるものと見做すことができる。

## (I - 1 - 8) 往還 (音読一語)

< 1 > 豊樂無諸疾疫。商估往還多獲宝貨。p.59 往還<sup>する</sup>い。

漢籍の用例を『国学宝典』を利用して検索すると、『漢書』0例、『後漢書』0例、『晋書』4例、『梁書』6例、『魏書』14例、『樂府詩集』3例、『世説新語』0例、『隋書』1例、『遊仙窟』1例、『祖堂集』0例がある。一部例を示す。

太子親臨者三焉，往還皆拜。(『晋書』・卷68)

往還之間，故不見其至也。(『魏書』・35)

積霜散之往還，鼓波濤之前卻。（『梁書』・卷 64）  
西蕃上將，句已往還。（『隋書』・21）  
身去長不返，簫聲時往還。（『樂府詩集』・卷 51）  
自恨往還疏，（『遊仙窟』）醍醐寺本 1344 年点「往\_還<sup>キ</sup>」真福寺本 1353 年点「往-還<sup>トサマヨヒ</sup>」  
仏典の用例を「CBETA 電子仏典」を利用して検索すると、581 例が存在する。2 例を示す。  
往還其中。（月支優婆塞支謙譯『佛說梵網六十二見經』 1-270）  
往還朋友。（三藏法師玄奘奉詔譯『阿毘達磨法蘊足論卷第九』 26 - 493）  
『敦煌變文校注』には 4 例がある、2 例を示す。  
交期朋友往還，一別無由再見。（『廬山遠公話』）  
崇樓高峻下，行路清霄阻往還。（『降魔變文』）

劉堅・江藍生（1997，改訂 1998）では「『往還』は「来往，交遊」の意味」とする。

（『遊仙窟』）の例は，真福寺本 1344 年点では「(ユ) キ (カヘ) ル」と訓読し，真福寺本 1353 年点では「(音読) トサマヨヒ」と文選訓みしている。本資料では二字の間に合符は加点されていないが「還」字にヲコト点「する」が加点されているので，音読一語として訓んでいるものと見做すことができる。

- I - 2 合符のみを加点している例 0 語
- II 二字一語として訓んでいない例
- II - 1 二字一語として訓まず和訓も不当な例 0 語
- II - 2 二字一語として訓んでいないが文意は大きく外れていない例

#### (II - 2 - 1) 雲集

< 1 > 雲集。咸願擁護無上大乘。読誦受持書写。p.4 雲の集  
< 2 > 竜神八部。既雲集已。各各至心合掌恭敬。p.5 雲の集

漢籍の用例を『国学宝典』を利用して検索すると、『漢書』1 例、『後漢書』7 例、『晋書』12 例、『梁書』2 例、『魏書』6 例、『隋書』1 例、『樂府詩集』5 例、『世說新語』0 例、『祖堂集』6 例、『遊仙窟』0 例がある。一部例を示す。

香泛翊翊，甘露降，慶雲集。（『漢書』・卷 22）  
四夷雲集龍門野，四七之際火為主。（『後漢書』・卷 1）  
義旗雲集，罪在元頭。（『晋書』・卷 99）  
趨學向風，雲集於京師矣。（『梁書』・卷 3）  
楚之渡河，百姓思舊，義眾雲集。（『魏書』・卷 37）

以振飢人，去倉數百裏，老幼雲集。（『隋書』・卷 24）

至摩突羅國，大眾雲集。（『祖堂集』・卷 1）

冠蓋雲集，樽俎星陳。（『樂府詩集』・卷 13）

仏典の用例を「CBETA 電子仏典」を利用して検索すると、用例がない。

『敦煌変文校註』には 2 例がある。その 2 例を示す。

皆來雲集，喚言菩薩起，莫戀無明睡，（『廬山遠公話』）

生杖魚鱗似雲集，（『大目乾連冥間救母変文』）

香坂（1994）では「雲集」は「雲のように集まる，雲集する」と説明している。

本資料では、2 例とも「(クモ) の如 (ク) (アツマル)」と訓み、二字一語としては訓んでいないが文意は外れていない。

## （Ⅱ - 2 - 2）経過

< 1 > 閻羅之界三塗極苦。不復経過。p.156 不復<sup>ヘヨキヲ</sup>経過

漢籍の用例を『国学宝典』を利用して検索すると、『漢書』0 例、『後漢書』3 例、『晋書』1 例、『梁書』1 例、『魏書』3 例、『樂府詩集』21 例、『世説新語』0 例、『隋書』1 例、『祖堂集』2 例、『遊仙窟』0 例がある。一部例を示す。

及後経過玄墓，輒悽愴致祭。（『後漢書』・卷 52）

比四造詣，及経過尊門，（『晋書』・卷 47）

文書所経過，不敢不陣。（『魏書』・卷 78）

経過次，近藥山下，路上忽見一個老人。（『祖堂集』・卷 4）

仏典の用例を「CBETA 電子仏典」を利用して検索すると 339 例が存在する。2 例を示す。

経過小腸。（隋天竺三藏闍那崛多等譯『起世經卷第二』16-321）

経過曠野飢饉之處。（唐天竺三藏達摩流支譯『佛説寶雨經卷第七』16-314）

『敦煌変文校註』には 2 例がある。2 例を示す。

倚託故難嫌浩闊，経過信任扑塵埃。（『双恩記』）

身肉悉皆充供養，経過千劫不為難。（『佛説阿彌陀經押座文』）

太田（1958，改訂 1981）では「《過》は二物の間を通りすぎるの意味をもつ助動詞。元來、動詞ですが、古代語でも複合動詞の後部をしめている用例が稀にあるが、唐代以後多く用いられる。完成をあらわす《過》が過去の場合に用いられたものは閥歴經驗を表すとも稱される。」とする。志村（1995）では「「～過」は「穿過」，「走過」，「經過」，「飛過」，「輾過」などと用いられ，唐代までの例は「通りすぎる」という動詞の原義からはずれていない，時間の経過を言うものはまだあらわれていないようである。」とする。

『日本書紀』の訓点は岩崎本平安中期点で二字の中央に一語であることを示す合符と和訓「フル」が加点されているので、和語一語として訓まれたことが確実である。

本資料では、「ヘヨキラし」と二語として訓んでいるが文意は外れていない。

(Ⅱ - 2 - 3) 思念 (一部Ⅰ - 1 - 4)

< 1 > 善思念之。吾当為汝分別解説。p.22 [善之思念]

< 2 > 諦聽善思念之。過去有王名金竜主。p.79 応し…思念

< 3 > 仏告菩提樹神善女天。諦聽諦聽善思念之。p.174 思念

本資料では、漢籍、仏典、敦煌変文の用例は前(Ⅰ - 1 - 4)に挙っている。先に示した如く(Ⅰ - 1 - 4)音読サ変動詞一語として訓んでいる例もあるが、「(オボ)セヨ(ネン)セヨ」「(オボ)し(ネン)す」「(オボセ)ヨ(ネンゼ)ヨ」と二語として訓んでいる例が3例ある。

(Ⅱ - 2 - 4) 吹倒

< 1 > 如猛風吹倒大樹。心迷失緒。都無所知。p.194 吹倒すか大樹を

漢籍の用例を『国学宝典』を利用して検索すると、『漢書』0例、『後漢書』0例、『晋書』0例、『梁書』0例、『魏書』0例、『隋書』1例、『樂府詩集』1例、『世説新語』0例、『祖堂集』0例、『遊仙窟』0例がある。一部例を示す。

大風起西南，吹倒靈臺候樓。(『隋書』・卷23)

一風二日吹倒山。白浪高於瓦官閣。(『樂府詩集』・卷90)

仏典の用例を「CBETA 電子仏典」を利用して検索すると10用例が存在する。2例を示す。

有一微妙之樹。被風吹倒。隋天竺三藏闍那崛多譯(『佛本行集經卷第十六』727 - 20)

有四毒龍口中吐火。吹倒彼幢吸如意珠。(簫齊沙門釋曇景譯摩『訶摩耶經卷』1012 - 25)

『敦煌変文校註』には用例がない。

本資料では、「(フ)キタフす」と二語として訓んでいるが文意は外れていない。

(Ⅱ - 2 - 5) 啼泣

< 1 > 時二王子。生大愁苦啼泣悲歎。即共相隨。p.192 啼泣

< 2 > 第二大臣懊惱啼泣。喉舌乾燥口不能言。p.194 啼泣

< 3 > 王子諸侍從。啼泣心憂惱。p.196 啼泣

< 4 > 路逢二子行啼泣。椎胸懊惱失容儀。p.198 啼泣

漢籍の用例を『国学宝典』を利用して検索すると、『漢書』6例、『後漢書』3例、『晋書』0例、『梁書』0例、『魏書』1例、『樂府詩集』1例、『世説新語』2例、『隋書』0例、『祖堂集』2例、『遊仙窟』0例がある。一部例を示す。

後妃夫人共啼泣止王。（『漢書』・卷63）

盆子惶恐，日夜啼泣。（『後漢書』・卷11）

日夜啼泣，遣請眾敬。（『魏書』・卷61）

神光悲啼泣淚而言：（『祖堂集』・卷2）

兒悲思啼泣，不飲它乳，遂死。（『世説新語』・惑溺第35）

對交啼泣淚不可止。（『樂府詩集』・卷38）

仏典の用例を「CBETA 電子仏典」を利用して検索すると548用例が存在する。2例を示す。

悲號啼泣。奉送如來。（東晉平陽沙門釋法顯譯『大般涅槃經卷中』1 - 197）

啼泣面目腫（北涼天竺三藏曇無讖譯『大般涅槃經卷第二』12 - 373）

『敦煌變文校註』には4例がある。2例を示す。

王見仙人啼泣（『八相變』）

父王不許，恐溺水也，子便啼泣。（『祇園因由記』）

日本書紀の訓点では、前田本院政期点が訓合符及び和訓「イサツ」「ナク」、図書寮本1142年点が熟合符及び和訓「イサツ」「ナク」を加点して和語一語で訓んでいる例と、兼方本弘安点で、訓合符を加点して右訓が「ナキイサチ」と二語で訓み、左訓が「ナキ」と一語で訓み、何れの訓みを採るかを示す合点は施されていない例がある。

本資料では、「ナキ（シホタ）リ」「（ナ）キ（シホタ）リ」「（ナキ）つ（シホタ）り」つ」と何れも二語として訓んでいるが文意は外れていない。

#### 4. まとめ

以上、二字動詞語を検討した結果

##### I 二字一語として訓んでいる例

I - 1 一語として訓んでいる例 8語

I - 2 合符のみを加点している例 0語

##### II 二字一語として訓んでいない例

II - 1 二字一語として訓まず和訓不当な例 0語

II - 2 二字一語として訓んでいない例が文意は大きく外れていない例 8語（2語がI - 1と一部重複となっている）。

II - 1が0例であるので、訓読の要である二字動詞の概念の把握は出来ているとも

言い得るが、これを日本書紀訓点資料における口語起源二字動詞 36 語の検討結果（唐 2009）I - 1…33 語，I - 2…1 語，II - 1…0 語，II - 2…4 語（2 語 I - 1 と一部重複）と比較すると，II - 2 の比較が明かに高い。つまり，日本書紀の訓点資料では原漢文が一語であるか二語であるかに相当注意を払っているが，本資料においてはそれに対する注意が薄くなっている。I - 1 でも音訓一語としている例が多く，本資料が平安初期仏典訓点資料の優品であることを考慮するならば，II - 2 の多さと共に，この問題に対する平安初期訓点資料の一般的な傾向とも見做し得る要素がある。

### 【使用テキスト】

春日政治（1942）『西大寺本金光明最勝王經古点の国語学的研究』岩波書店  
中華電子協会（1988～1991）『CBETA 電子仏典』（大正新脩大藏經卷第一～五十五・八十五卷）

### 【参考文献】

- 太田辰夫（1958，改訂 1981）『中国語歴史文法』江南書店・朋友書店金岡照光（1978，改訂 1992）『仏教漢文の読み方』春秋社
- 石塚晴通（1982）「日本書紀古訓の研究」（三島海雲記念財団 56 年度事業報告）
- 石塚晴通（1983）「日本書紀古訓について其の一，其の二」（『天理図書館善本叢書月報 55，56』）
- 志村良治（1984）『中国中世語法史研究』三冬社
- 石塚晴通（1985）「岩崎本日本書紀初点の合符」『東洋学報』66-1.2.3.4
- 石塚晴通（1986）「岩崎本日本書紀初点の合符に見られる単語意識」『築島裕博士還暦記念国語学論集』明治書院
- 松尾良樹（1986a）「金岡照光の『漢訳仏典』を読む」『和漢比較文学』第 2 号
- 松尾良樹（1987）「『日本書紀』と唐代口語」『和漢比較文学』第 3 号
- 松尾良樹（1988）「唐代の語彙における文白異同」『漢語史の諸問題』別冊，京都大学人文科学研究所
- 太田辰夫（1988，改訂 1999）『中国語史通考』白帝社
- 松尾良樹（1991）「『訓点資料を読む』—仏典の口語表現を中心に—」『奈良女子大学叙説』第 18 号
- 朱慶之（1992）『佛典與中古漢語詞彙研究』天津出版社程湘清（1992）『魏晉南北朝漢語研究』山東教育出版社吳金華（1994）『世說新語考釋』安徽教育出版社
- 塩見邦彦（1995）『唐詩口語の研究』中国書店
- 伊藤丈（1995，改訂 2008）『仏教漢文入門』大蔵出版
- 劉堅・江藍生（1997，改訂 1998）『唐五代語言詞典』上海教育出版社張涌泉・黃征（1997）『敦煌變文校注』中華書局
- 胡敕瑞（2002）『『論衡』与「東漢佛典詞語比較研究』』巴蜀出版社程湘清（2003）『漢語史專書復音詞研究』商務印書館
- 方一新・王雲路（2006）『中古漢語讀本』上海教育出版社
- 唐焯（2009）『日本書紀における中国口語起源二字漢語の訓読』北海道大学出版会